

動労「本部」の警察労働運動の実態暴露さる

嶋田・斎藤が警察官と名刺交換!



82.7.17
No. 1098

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六公衆)五三三(七)七二〇七

7/5「6・12事件」第8回公判で明らかになる

動労「本部」の「六・一二事件」デッチ上げ告訴により、津田沼支部六名の仲間が不当逮捕されてちようど一周年の七月十五日、千葉地裁において「六・一二事件」第八回公判が開かれた。

公判では検察側証人として出廷した三橋医師、警察官・清水に対する反対尋問での証言を通して、動労「本部」の驚くべき警察労働運動の実態と革マル分子・嶋田誠らのデッチ上げ性があまるところなく暴露された。

「事件」をデッチ上げるための

嶋田の入院

最初に検察側証人として証言にたった三橋医師は、嶋田誠のロッド骨が三本折れていたことを強調したが、骨折の程度が重いのか軽いのかの質問には、最後まではっきりしたことをいわなかった。ところが、嶋田誠が入院する程のケガではなかったことが、他ならぬ警察官・清水の証言から明らかとなった。

すなわち、「六・一二事件」当日、三橋病院にかけつけた警察官・清水に対して、三橋医師は「嶋田が入院させてくれと行ってきたが、ベットがあいていなくて困った」と訴えたと言ったのである。

嶋田誠のケガが入院する程のものではなかったことを認める証拠として、三橋医師自身の作成したカルテには、嶋田誠が訴えた全身打撲の症状が全くなく、入院時の記録に「徒歩入院」「胸痛軽い」「自生可」と記載されていることでも明らかなのである。

しかし、なぜか警察医・三橋医師は、この事実をいいながら、むづかしい法医学用語でのらりくらりとごまかしていたが、結局、ロッド骨が横に倒れた時の圧力でも簡単に折れる骨であることを認め、嶋田らのデッチ上げ性が明らかとなった。

「六・一二」当日警察官と

話し合った嶋田・斎藤(吉)

つづいて検察側証人として証言にたった船橋西警察署・清水警部補は、「六・一二事件」発生直後、いち早く察知し、三橋病院にかけつけると、すでに習志野署の刑事二名が来ていたことを明らかにしたものの、なぜか情報入取の経路についてはいわなかった。

ところが、三橋病院の院長室で、三橋医師、習志野署刑事二名、船橋西署清水、鵜沢が嶋田、斎藤(吉)らと話し合ったという驚くべき事実について証言した。

そこでのやりとりは、斎藤(吉)が清水らに「どなたですか」ときいたので、清水が名刺を渡すと斎藤(吉)も名刺を出して交換したというのだ。そして清水が「いつ、どこで、誰にやられたのか」ときくと、「津田沼電車区入口の踏切のところまで待ち伏せされてやられた」と答え、さらに清水が「被害届を出したらどうか」ときくと、斎藤(吉)は「やったヤツは全部わかっている。今日がまんできない。告訴する」と答えたという事実を証言した。

最初から警察に協力的だった

全組合員の皆さん、全国の労働者の皆さん、これが「水本謀略」をはじめとする権力・警察の謀略論を唱える動労「本部」革マルの真の姿である。

警察官と名刺交換までして、「動労千葉にやられた」と積極的にデッチ上げの供述を行い、権力に励まされ、喜んで「告訴する」と断言した嶋田・斎藤らが、最初から警察に協力的であったことが今回の公判で明らかとなった。

あらかじめデッチ上げが準備された

公判終了後、教育会館で総括集会を行い、鈴木弁護士からの公判報告につづいて裁判闘争を闘う三名を代表して吉岡一津田沼支部書記長から「六・一二があらかじめ準備されたデッチ上げであることが明らかになった。今後の反証で嶋田、斎藤らのデッチ上げ性を暴き、全員無罪を勝ち取るためにがんばりたい。」との決意表明をうけ公判闘争を終えた。

次回公判は、八月三十一日、十三時です。いよいよ、弁護側反証に入ります。全組合員の公判闘争への結集をよびかけます。